

Title	語文 第4輯 編輯後記/投稿規定/奥付
Author(s)	
Citation	語文. 1951, 4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68392
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編輯後記

秋も深くなつて、今は疎林にもひとしい畝傍のなぞへからは、空もひとときは広く澄んで見えるやうになつた。人氣のない山の際の木末に、百舌鳥のひと声がやむと、山のころよい秋の吐息がきこえてくる。

かつては、こんもりと茂つてゐて、小道の下草を踏んで山頂に立てば、茶店も出てゐた見はらしのよい楽しい山。やがて、神の山と化して、人をも、ちかよせぬ畏き山。ついで、下草も何も苪り取られて、車をはこんでの盗木しきりの恐るべき山。

人に忘れられた今、初めて、百舌鳥は高らかに山のいぶきを秋の空におくる。
 // あはただしいこの國のいきづかひ。創作界の古典流行も結構です。文学研究の各論各説も結構です。強いやうで弱いのは人間の無意識心理。ジャアナリズムがけいかく的に映えてゆくと、感も鈍つて、うそもほんたうに見えてくるもの。学問の世界だけとは思つてもあやしいものです。もともと身勝手な理屈ずきの人間、それに……//
 野兎は小さくびをかしげると、なぞへをかけた

あがつて、妙な手つきで山裾をふりかへつた。日だまりの野菊と萩が、明日香の風にひとしきりゆれ合つてゐる。

// それに、いくら停電で暗いからといって、油を買ひにお菓子屋に飛びこんだりされては困ります。お菓子屋で油を売らないからとておこるにはあたらなひこと。油は油屋、おかしは菓子屋。みんなめいめいの好みにあつたお店。油も必需、お菓子も必需。屋号はかまへて、文獻館、歴史社会屋、文芸屋、民俗屋まだまだ。せめて学問の巷だけでも、お互ひの特色にもたれあひ助けあつてトランスのエナケツトを発揮させよう。せめて、文化の田舎ではなくて文化の都では、ね。また、せめてここだけは、うそをほんたうと思ひこまないやうにさせよう。どんなに世相があはたしくても。//

日の暮になつて、木の葉がさやぎ、風が吹かうとしてもいい。山は人に忘れられて、初めて、千古の美をよそほふ。いまのは百舌鳥の声。疎林の間のあの夕空の茜色は……日本の秋。

前号予告の横山氏の稿は編輯の都合で次号に廻した。御諒恕を乞ふ。
 (犬養記)

投稿規定

- 直接購読者は投稿することができる。
- 原稿の内容は国語・国文学・国語教育に関するものであること。分量は四百語原稿用紙二十枚以内とする。
- 原稿の送り先は「豊中市柴原、大阪大学文学部国文学研究室内、語文編輯委員」宛。
- 原稿の採否は編輯委員に一任のこと。
- 採用しなかつた原稿は返送料が添附してあれば返送に応ずる。
- 一括購読者が投稿する際には代表者から紹介せられたい。
- ◆雑誌の寄贈・交換について
- 雑誌の寄贈・交換は大阪府豊中市柴原 大阪大学文学部 国文学研究室宛に願いたい。
- ◆購読について
- 購読希望者は発行所宛前金を添えて申込むこと。(送金は振替を利用されたい)
- 一部 四十円 送料 八円
- 一年分(四回分) 百六十円(送料共)
- 五冊以上一括購読の時は一割引の上送料は不要とする。

語文 第四輯 定価四十円 送料 八円

昭和二十六年十一月廿五日印刷
 昭和二十六年十一月三十日発行

編輯者 代表 小島吉雄
 大坂府豊中市柴原 大阪大学文学部国文学研究室

発行者 前田春雄
 寿印刷株式会社

印刷所

発行所 邦進社
 電話 船場(25)1990 番
 報社大坂123135 番